

高岸源太郎と料亭「なるみ」について

矢島 嗣久

高岸源太郎は福井県に生まれ、大正の初期から昭和二

十年代まで、別府市に料亭「なるみ」を経営して大いに名を成し、別府の宣伝と公共事業に尽くした。

一 源太郎の出生と修業時代

高岸源太郎は明治十年（一八七七）十月三日に福井県今立郡南中山村中津山（現今立町國中）に生まれる。

父長兵衛は漆の仲買を職業とし、後年源太郎が四、五歳の時、信州長野に移住した。

源太郎は十三、四歳の頃、志を立てて大阪で料理道の修業に入った。大阪の職人時代から金次郎と名乗り、個性が激しく直情的で正義感の強いところから「鉄砲金」とあだ名される。彼は合氣道を会得していたため喧嘩も強かったが、常に素手で闘い、負けたことが無いという

のが自慢であった。

源太郎は大阪で修業後、料理長として名を上げた。特に「煮炊きに関しては金さん（鉄砲金）の右に出る者はいない」といわれた。明治の後年には広島県宮島の料亭「岩惣」に料理長として勤務する。この「岩惣」在職中に別府出身の先妻ナルと知りあった。ナルは、後年料亭「なるみ」と共に別府の兄弟店として繁盛した料亭「お多福」の先代安部光二郎の妹にあたる。

源太郎は宮島の「岩惣」を退職後、山口県下関の料亭「群芳閣」に身を寄せて、ふぐ料理の技術を研究した。

二 料亭「なるみ」の開店

源太郎は大正三年頃来別し、最初は楠木町の大衆劇場「なの字館」の横に小さなすし屋を開き、妻ナルもすし

を握った。現在の楠木町七の秋葉通り寄りである。

翌年の大正四年（一九一五）、浮世小路、もと楠木町店の裏の一角に割烹店「なるみ」を創業する。現在の流川三丁目にある丸食の南側、楠木町六にあたる。

「なるみ」の名の由来は、「なる」は妻ナルから、「み」は兄弟店お多福の光二郎の一人娘「ミサヲ」の「み」を採って源太郎自身が付けたものである。ミサヲはナルの姪で安部実先夫人にあたる。

源太郎、ナル夫婦は二人とも、朝から深夜まで裸足で走りまわり、最初は浜脇の遊廓に早朝から出前に精を出した。この二人の働きぶりを中浜筋の洋品店「あかゝべ」の先々代小梟虎市おがたが見て、出前用の三輪車（リヤカー）や営業用の什器を貸し与えた。

三 源太郎の人柄と信条

昭和十四年（一九三九）、現二代目克郎氏くわくろうが養子に迎えられた。克郎氏は、源太郎と同郷の福井県で同じ村の出身である。

源太郎は元来単純な人で策を弄することを嫌い、感激

屋で扱いやすいタイプであるが、反面己の正義感をあくまでも基準にして強情なところも見受けられた。

宇都宮則綱先生のぶなが機会あるごとに「なるみほど別府で巨万の富を稼いだ店もないが、なるみほど巨万の財を散じた店もない」と話しておられた。則綱先生は鉄輪の鬼山地獄を経営され、大正十三年（一九二四）と昭和七年（一九三二）には別府市議会議員、のち衆議院議員に当選され代議士として活躍された。

源太郎は、時には他人に金子を貸しても借用証文をとらないことでも有名で、死後一枚の貸金証文も無かった。源太郎の日常生活は実に質素なものであり。外面は頭の低い笑顔のよい人であるが、家庭では己を持つことも厳しいものがあり、家人にもやかましい主人であった。衣食住には粗末で一生を床の間も無い自室の茶の間で起き居し、この居間で人生の終焉を迎えた。別荘は顧客の奉仕とサーブスに使用して、自分の安逸な生活には一日も使用することなく終わった。



初代女将 ナル



高岸 源太郎

四 「なるみ」を取り巻く応援者達

宇都宮則綱先生は自ら「なるみの宣伝係」と称し、開店当時から応援者だった。先生は大正十二年（一九二三）の関東大震災後、東京本郷の黒門町に「なるみ支店」の看板でふぐ料理店を開店する。

中浜筋の「あかかべ」の先代小泉五郎も源太郎の友人であり、「なるみ」の強力な支援者でもあった。

源太郎の主治医で、その最後を看取った内田初三郎先生とは医師と患者の間を超えた関係で、源太郎は終生内田先生を「家務顧問」として頼りにしていた。

楠町の池辺守松の好意でその所有地を料亭「なるみ」として永年に渡り拝借し、昭和二十年（一九四五）には源太郎の申し出によりこの土地を譲り受けた。

元別府市収入役黒田正氏尊父の黒田利太郎は「なるみ」の創業当初からの協力者で、源太郎、ナル夫妻の信頼を得て会計及び雑務一切を引き受けて頂き、大番頭として三十年ちかく「なるみ」の帳場に座って居られた。

昭和二十年頃、「なるみ」が訴訟問題で困っているところを木下郁先生^{かおろ}の調停により円満に解決することがで

きた。先生は昭和三十年（一九五五）四月、大分県知事就任後も「なるみ」を応援された。

油屋熊八は愛媛県宇和島市の出身で、明治四十三年（一九一〇）、別府流川に亀の井旅館（現亀ノ井ホテル）を開業した。自らを別府の外務大臣と任じて観光別府を内外に宣伝し、昭和二年（一九二七）にはバス四台を購入して、バスガイド付きの地獄巡りを始めた。源太郎は熊八を先輩として尊敬し、親交していた。

昭和三年十二月、別府大阪航路が二便制となったため、料亭「なるみ」も大いに繁盛する。

最盛期の「なるみ」は四百三十坪の敷地に、三階には百三十畳で舞台付きの大広間をはじめ、二階には七十畳一部屋と二十五畳二部屋の中広間があり、全部で三十近い部屋を持った料亭で、三百人はゆうに利用できた。

五 久邇宮家との関係

大正十二年（一九二三）、源太郎は第十二代大分県官選知事後藤祐明^{ゆうめい}氏の知偶を得て、同氏の親友で在京の大分県宇佐出身の賀来佐賀太郎氏（元台湾総督府総務長官、



料亭「なるみ」の正門

兼務専売局長)に引き合わされた。

当時、賀来氏は別府市亀川町に建設された台湾総督府関係の療養宿泊施設「長生閣」の委託経営者を探していたが、翌年の大正十三年頃、後藤知事の推薦で源太郎がその指名を受けることになる。

長生閣を創設したのは、のちの東京市長となられた台湾総督府の民政長官後藤新平伯爵である。当時、後藤伯爵の直屬部下であった賀来佐賀太郎専売局長(台湾総督府)は、のち総督府の総務長官となられた。

大正十四年一月、亀川の長生閣のある隣接地に別府海軍病院ができる。長生閣が海軍病院に寄贈されたのは、太平洋戦争たけなわの昭和十八年(一九四三)であった。「なるみ」は当時、長生閣が海軍病院に寄贈手続きが完了するまで、この経営を続けた。

その間、長生閣内に皇族用の御殿も併設され、賀来氏が昭和天皇の皇后(良子妃殿下)の父にあたる久邇宮邦彦王殿下の家務顧問をされておられた関係で、昭和六、七年頃(一九三一、三二)、殿下並びに大妃殿下、及び良子女王殿下(のち昭和天皇の皇后陛下)のお三方がお

揃いで亀川の長生閣に御成りの際、始めて源太郎が御奉仕したのが宮家に出入りを始めたきっかけとなった。

毎年、年末の三十日には、源太郎が氷詰めにしたふぐを持参して東京青山常磐松町の久邇宮家に伺い、自ら包丁を振って料理し宮様に献上した。この行事は太平洋戦争の昭和十八年頃まで続いた。

六 海軍との関係

源太郎は、明治の末ごろ、宮島の「岩惣」時代と同郷福井県出身の加藤寛治大将(当時は佐官級)と出会った。以来加藤大将の知遇を得て、別府が海軍の休養指定地となり、料亭「なるみ」は連合艦隊の将校の指定料亭となった。以後、戦前戦中を通して各艦隊が陸続と別府湾に入港するようになる。

加藤寛治は海軍大学校長及び連合艦隊司令長官を歴任、昭和四年(一九二九)に軍令部長となり、翌昭和五年にはロンドン条約に対して、政府に反対する強硬派の代表となった。

永野修身大将(海軍大臣)ほか歴代の連合艦隊司令長

官、吉田善吾大将（海軍大臣）、高橋三吉大将、豊田副武大将（大分県杵築市出身）、山本五十六大将（のち元帥）、古賀峯一大将（のち元帥）、南雲忠一中将、宇垣纏中将らが「なるみ」を利用した。

最盛期の別府には、芸者が二百四十人いて、その殆どがネイビイエス（海軍芸者）と呼ばれていた。「検番」は「なるみ」と流川通りとの間にあり、その付近には「置き屋」が三十軒ばかり軒を列ねていた。

源太郎は海軍関係への献金運動も、余剰さえあれば惜しみ無く続けた。彼は、大野保治氏（別府史談会副会長）の実母大野チワさんと一緒に鉄輪海地獄付近に二千五百坪の山林を買収して、五十メートルの温泉プールを傷病兵のための慰安用に建設し、平屋五棟の休憩所も造った。なお、艦隊入港のさい将兵の上陸が不便と聞けば独力で浮き栈橋を造り、また飛行機の献納にも奔走した。このように際限無く献金を続け、高岸家には感謝状、寄付採納書は二冊の帳簿に二百枚以上残されている。

昭和八年（一九三三）二月九日、鳥海、摩耶、高雄、愛宕の最新一万トン級巡洋艦を中心とする末次信正中将

の率いる第二艦隊二十九隻が別府湾に入港した。四日間碇泊した第二艦隊は十二日太平洋へと出航した。

そして二月二十一日には小林斎造中将の率いる第一艦隊の旗艦陸奥以下三十五隻が入港し、約一万三千の兵士が三日間にわたって上陸した。

初代女将ナルは昭和九年（一九三四）二月九日に死去した。享年五十三歳である。

二代目女将の盛雄は愛知県卯之町（現宇和町）の出身で、兄義一氏は後年源太郎の薦めで中国青島に「なるみ支店」を開店して大いに成功した。

昭和十五年（一九四〇）十一月、別府湾に日本連合艦隊が入港し、高松宮宣仁親王殿下が乗組み将校として別府に上陸される。連合艦隊の別府入港はこれが最後となった。

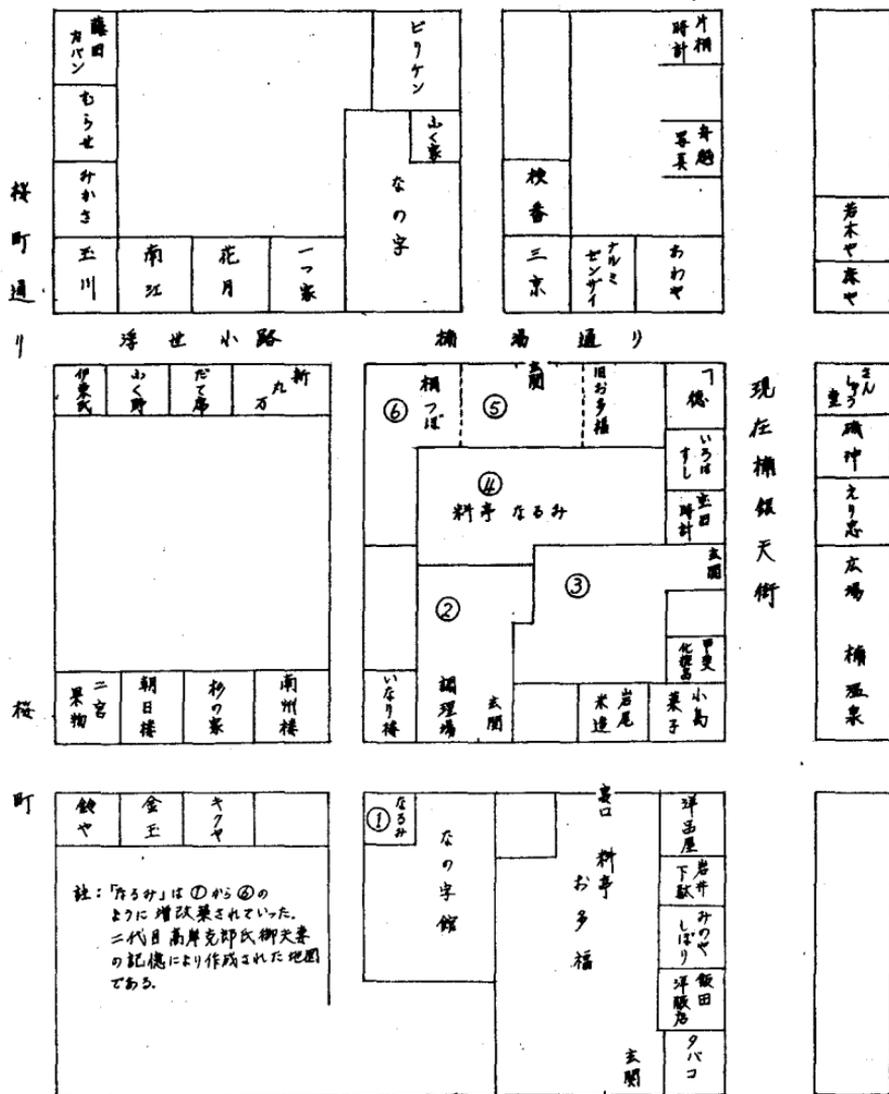
七 太平洋戦争と「なるみ」

昭和十六年十二月八日、日本軍のハワイ真珠湾攻撃によって太平洋戦争が勃発した。この奇襲作戦は、連合艦隊司令長官山本五十六によって計画されたものである。

料亭「なるか」と「お多福」の位置図

大正3年から昭和40年頃まで

流川



飲食通り

真珠湾攻撃隊の司令長官南雲忠一中将以下攻撃隊幹部士官の殆どが、翌年の一月中旬頃、台湾沖から大分航空隊に飛来して全員が「なるみ」と「お多福」に分かれて、凱旋後初めての慰労宴が催された。

「お多福」は最初仕出し屋として「なるみ」の北東側の隅にあったが、のち南側に移転拡張した。新料亭「お多福」の場所は、「なるみ」とは道路を隔てていて、その玄関は南側の秋葉通りに面していた。

この席上、南雲司令長官から「この写真は宇佐の攻撃隊に撮らせて、旗艦（航空母艦赤城）で現像したもので軍令部にもまだやってないのだぞ」といって、源太郎が直接頂いた写真が高岸家に現存している。この写真は日本軍の魚雷が白線を引いて敵艦に当たる寸前の写真で他に見えないもので有名である。

昭和十八年（一九四三）四月十八日、一式陸攻（双発、七人乗り）に分乗して前線視察に出発した連合艦隊司令長官山本五十六はソロモン諸島ブイン上空でアメリカ軍機に撃墜され戦死した。享年六十歳である。

終戦前年の昭和十九年二月、養子克郎氏の二度目の応



真珠湾攻撃の写真

召の際、大分海軍航空司令官から「なるみ」を呉水交社の別府分室として海軍の将校倶楽部とし海軍に任せないかとの話があり、海軍に一任することに決定する。その結果、料亭「なるみ」は「海軍将校倶楽部」と名称を変えて、昭和二十年の敗戦まで海軍専用の宿所となった。克郎氏の出征後、高岸家の家族は海軍の庇護を受けて専ら二十歳前後の特攻隊将士達に奉仕を尽くした。高岸家には彼らの遺書が数多く残されている。

昭和十九年三月、古賀峯一連合艦隊司令長官は、パラオとダバオ間の海上にて飛行機事故のため戦死する。

別府市末広町八の法務局跡、現在のチビッコ広場の北東側の道路に面した隅に御影石の国旗掲揚台がある。これには、内田初三郎先生と源太郎の依頼で古賀峯一長官が「なるみ」において揮毫された「国威顯揚こくゐけんぱう」という文字が彫られ、側面には「昭和十七年一月一日、北末広区」と記されている。

南雲忠一中将は中部太平洋方面艦隊司令長官としてサイパン島にて昭和十九年七月七日に戦死した。

源太郎は昭和十九年七月には、公益のために多額の私

財を寄付した功労者に与えられる紺受褒賞を受賞する。

沖繩への特攻戦の主力指揮者であった第五航空艦隊司令長官宇垣纏中将は、昭和二十年八月十五日の敗戦と同時に、自決を決意して、大分基地から彗星爆撃機十一機（二人乗り）を率いて、十五日夕刻、沖繩付近のアメリカ航空母艦に突入して果てた。享年五十六歳である。これは日本軍最後の特攻攻撃となった。

八 大谷光瑞鏡如上人との関係

終戦後、伊勢神宮の戦禍による荒廃を八幡朝見神社の宮司みやじ神先生から聞いた源太郎は、「なるみ」の営業の余剰金を献納した。奉讃会長の村上勇先生から「なるみが大分県割当額の半分以上を率先して献納してくれたので大変助かりました」と感謝された。

昭和二十年（一九四五）十月、終戦により別府海軍病院が国立亀川病院として発足する。なお、昭和二十五年七月一日から国立別府病院と改称された。

昭和二十二年三月、大谷探検隊の組織者で、浄土真宗本願寺派（西本願寺）第二十二世前門主大谷光瑞こうすいげいか鏡如下

(鏡如上人)は、満州から帰国後、来別し国立亀川病院に入院されていて、退院後の余生を風光明媚な別府の鉄輪付近に定めたいと希望されていた。

源太郎は当時の別府市長脇鉄一氏から、光瑞貌下に対して一日でも永く別府に御滞在を懇請していることを聞いた。源太郎は「源太郎個人が所有している鉄輪の土地を無条件でお貸ししたい」と申し出て、貌下も非常に喜ばれ、貌下自らの設計で御住居が鉄輪風呂本に建築された。

光瑞貌下は昭和二十三年十月十四日、鉄輪の御住居に遷化(死去)された。享年七十三歳である。貌下愛用のメートルの竹製のステッキは御遺品として源太郎が拝受し、高岸家に大切に保存されている。

九 源太郎の晩年

昭和二十五年(一九五〇)三月、鉄輪地区の有志の方々から「子供公園として、大谷光瑞貌下が住居されていた土地を寄付していただきたい」と申し出があり、源太郎自身は別の計画があったようであるが、これを了承した。

その住居跡は、現在「大谷公園」となって石碑「光瑞上人遷化之碑」が建立されている。

源太郎は昭和二十六年二月十五日に直腸がんのため死去した。享年七十五歳である。葬儀は浄土真宗本願寺派(西本願寺)の光照法主貌下の正式代行者として藤音得忍本願寺総長(佐賀関町神崎、教尊寺出身)が御差遣の上、直葬として盛大に行われた。なお、法王貌下直筆による戒名「瑞祥院釋顯誠」を頂戴する。

加藤称司氏の発議により、大谷公園の一角に「高岸源太郎翁頌徳碑」が建立された。その碑文によれば、「翁は明治十年福井県南中山村に生る。壮年別府市に住居を構え「なるみ」を経営して大いに名を成す。別府の宣伝と公共事業に尽すこと数十年本公園土地も亦翁の寄贈によるものなり。

四百七十四坪 高岸 源太郎

二百八十余坪 同 盛雄

昭和二十六年二月、七十五才にて幽界に入る。翁の功績を記念する為有志相謀り本頌徳碑を建立す。

昭和三十五年二月

建立委員長 宇都宮 則綱

外 八 名

加藤 称 司

右記録す。
と記されている。

なお、これ以前に大谷公園に隣接する鉄輪交番及び消防団の敷地も源太郎の寄贈によるものである。

「なるみ」の二代目女将盛雄は昭和四十六年（一九七

一）二月四日に死去した。享年七十二歳である



二代目女将 盛雄

「なるみ」は南須賀（九州横断道路南側）へ移転のため、楠店（楠湯通り）は昭和四十年三月に閉店された。

現在、二代目高岸克郎氏は昭和三十二年三月から別府市石垣東十丁目に「天ぶら虎徹」を経営されている。

最後に、多くの御教示を頂きました高岸克郎氏、及び大野保治氏に対して、紙面をお借りして厚くお礼を申し上げます。

引用参考文献

高岸源太郎小傳 昭和五八 二代目 高岸克郎著

私論 連合艦隊の生涯 豊田穰著 光人社

波まくらいくたびぞ 豊田穰著 講談社

大分百科辞典 昭和五五 大分放送

別府市誌 昭和六十 別府市役所

別府温泉歴史略年表 昭和四一 堀藤吉郎著

別府歴史散歩 泉都有情 平成五 西日本新聞社